

コミュニケーション環境に応じた逸脱的構文の発達

一会話における「な」始まり発話を例に一

堀内ふみ野(日本女子大学) 中山俊秀(東京外国語大学)

1. はじめに

本研究では、日常会話で観察される (1) のような [ØなN(名詞)] で始まる発話 (以降、「な」始まり発話と呼ぶ) を事例に、逸脱的構文が発達する動機づけを使用基盤言語学のアプローチ (Bybee, 2006 等) で分析する。

(1) (説明を締め括る発話で) Øな感じですね

「な」は規範的には形容動詞や助動詞の連体活用語尾として語幹に後続するが (e.g. 不思議な感じ, 鬼のような顔), (1) は「な」が発話頭に生起する点で逸脱的である。本研究では、『日本語日常会話コーパス』(小磯他, 2023, 以下CEJC) で「な」始まり発話, および, その発話構造の発達に寄与したと思われる関連構文を観察し, この逸脱的構文が日常会話の環境で発達した動機づけをソーシャル・メディアの用法とも比較しながら考察する。出典表記のない例文はCEJCからの引用である。

2. 会話における「な」始まり発話の事例

まず, 「な」始まり発話の構造的・機能的特徴を観察する。CEJC内の「な」で始まる発話を検索したところ¹, 298例が観察された。大部分は「なので」「なのに」「なのかな」「なんですよ」などの連語であり, 「な」の直後が普通名詞である事例は6例(後続名詞の内訳は, 「感じ」が3例, 「気」「イメージ」「わけ」が各1例)であった。最も高頻度だった「な感じ」の具体例を示す²。

(2) は, 理代子が, 勤務先の高校での仕事について, 他校と比べながら友人の久美に説明している場面である。7行目の, 統語的に不完全でありながらも語りが一通り終わった発話のあと, 久美からの相槌があり, 12行目で理代子が「Øな感じですね」と述べ, 語りを締め括る。このあと, それまで聞き手として相槌を

(2) K008_016 (抜粋)

1	理代子	なんかほかから移ってきた(0.324)ね 荒れてるところから移ってきた先生なんか(0.137)から話し聞くと:(1.126)ね:警察沙汰みたいなのが: ひっきりなしだったり:(0.331)うーん 親との(0.195)問題がいっぱいあったり..
2	久美	(T (U そっか)).
3	久美	うん うん.
4	久美	うん.
5	久美	あー.
6	久美	はい.
7	理代子	ってゆうところもあるみたいなんで:(0.32)そこに比べたら:(0.233)まあ 生活指導の中でのお仕事 そうゆう (D テ) そうゆう的なお仕事は少なめとゆうか.
8	久美	うーん うん.
9	久美	あー あー.
10	理代子	うん.
11	久美	(T そうね.).
12	理代子	な感じですね.
13	久美	(T えー).
14	久美	(T (U すごい)).
15	久美	(G いや や).
16	久美	(W モ もう)全然 (F あの)(0.605)今:(U うー) 接してる:若い人はやっぱり(0.153)(D ツ) (X コース)(0.252)(D #)一番下は十八歳だから(0.26)それ以下の(0.299)子たちって全然接してないから.

¹ コーパス検索アプリケーション「中納言」(バージョン 2.7.2 データバージョン 2023.03) で, 発話単位頭から1語の要素について, 語彙素が「だ」, 書字形出現形が「な」の事例を検索した。

² 会話データの書き起こしはCEJCの転記テキストに基づく。転記タグの意味を次に示す。

(時間) ポーズ長 (秒) : 非語彙的な母音の引き延ばし (T) 小さい声で発話している箇所 (U) 聞き取りや語の判断が不確かな箇所 (D) 語のいいさし (G) 可読性が低い口語表現 (F) 「あの」「その」等がフィラーとして用いられる場合 (W) 言い誤り・発音の怠け等の一時的な発音エラー (X) 語が不明な箇所 (R) 個人情報などに関わる仮名・伏字処理を行った箇所

打っていた久美がターンを取っている。

(3) は、美沙がホノルルトライアスロンのバイク種目について説明している場面で、玲子から「ペナルティーとかはないの？」と聞かれた後の会話である。ここでは、語り手の美沙が自分のパソコンに大会の写真を表示し、玲子にもそれを見せながら話している。15行目で美沙は「まだでもホノトラはそんなにあれだけど。」と述べ、パソコン画面をスクロールさせてから、18行目で「な感じで..」と発話する。その後、20行目以降は「で: 最後はランだよ。」と別種目の話へとトピックが移行する。

「な」始まり発話は[な感じ+コピュラ/終助詞.]の形式を取りやすく(「な感じ」で始まる3例は全てコピュラまたは終助詞が後続)、主な語り手が語りをいったん締め括る際に生起するという共通性が見られる。形式・機能がある程度パターン化している点で、構文的性質が認められると言えるだろう。同時に、「な」始まり発話の事例はまだ少なく、CEJCの転記テキストで「そんな感じ」の言い間違いとされている事例もあったことから、この形式は既に定着している構文というより今まさに構文化が進んでいる変化の最先端の形式と言えるのではないかと。次節以降では、言語使用の積み重ねの中に新奇の構文形成や言語変化の原点を求める使用基盤のアプローチで、この構文化の動機づけを探る。

(3) C001_002 (抜粋)

1	美沙	あると思う。
2	玲子	うん。
3	美沙	なんか でもちゃんと (G まあ) 審判の人が見 (0.469) 見て (0.24) 気が付けばの話しなれだけど。
4	玲子	うん。
5	玲子	うん うん。
6	玲子	へー。
7	美沙	なんか で (0.326) どころから乗るとかあ このスタートラインを越えないと乗っちゃいけないの。
8	玲子	うーん。
9	玲子	うーん。
10	玲子	うん うん うん。
11	美沙	こっから乗る (0.702) とか。
12	玲子	うん うん。
13	美沙	なんか でも見てるといついんだよね。
14	玲子	うん。
15	美沙	まだ でもホノトラはそんなに (0.997) あれだけど。
16	玲子	うん。
17	美沙	うん。
18	美沙	な感じで..
19	玲子	へー。
20	美沙	で: 最後はランだよ。
21	玲子	うん。
22	美沙	うん。

3. 構文発達の背景—「な感じ」のチャンク化と「な」の機能変化—

「な」始まり発話の発達に関連していると考えられる現象の一つは、「な感じ」のチャンク化と、それに伴う「な」の機能変化である。CEJCにおける「な感じ」の用例を発話冒頭に限定することなく観察すると、「な感じ」が形容詞・助動詞の語幹以外に後続する事例が一定数観察された。(4a) では名詞句、(4b) では定型性を帯びた文に後続している。

- (4) a. まあまあ 営業さんな感じだよ。[<名詞句>な感じ]
b. だからまあまあ 推して知るべしな感じ。/ ありがとうございますな感じで。[<定型文>な感じ]

「素敵な庭」のような規範的な連体修飾構造[<形容動詞語幹>なN]ではNが「感じ」である割合は4.8%(972例中47例)にとどまり、N部分に他の名詞も多く生起する。しかし、[<名詞句>なN]ではNが「感じ」である割合が18.4%(141例中26例)、[<定型文>なN]ではそれが36.4%(11例中4例)と、[XなN]のXとNの間に統語的分断がある事例で「感じ」が生起しやすい傾向が見られた。³「感じ」という名詞の意味的な汎用性の高さと連動し、会話において[Xな感じ]は、多様な構造をXに取る汎用性の高い構文となっている。この構文の統語的主要部はNだが、(4)の事例のように意味的には「な感じ」は付加的で、発話を締め括る文末モダリティ要素のように機能している。

さらに、(4)のように語幹以外に後続する統語的に逸脱した「な感じ」の音声を聞いたところ、約2割は、「な」の前にポーズがある、または直前の母音が引き伸ばされる(e.g. 12時撤回:な感じ)等、「な」の前に音声的切れ目を伴っていた。(5)は、保育士が1対1で対応しないといけなほど手がかかる子どもの話をしている文脈での発話である。

- (5) 今日も1対1(0.8秒) な感じ (0.1秒) ぐらい (0.3秒) 朝機嫌悪くて (K001_017)

この事例では、0.8秒のポーズの後に「な感じ」が産出されている。言い淀みの多さからも文構築に困難が生じている様子が見られるが、「1対1」の後にモダリティ要素である「な感じ」を置くことで構造がいったん立て直され、「1対1」から直接はつながりにくい構造を持つ「ぐらい 朝機嫌悪くて」という表現が続けられている。⁴

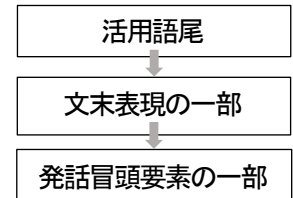
³ 便宜的に、[<形容動詞語幹>なN]は「な」の前が「形容詞一般」の事例、[<名詞句>なN]は「な」の前が「普通名詞一般」の事例、[<定型文>なN]は「な」の前が「助動詞」の事例を「中納言」で検索して抽出した。

⁴ CEJCの転記テキストで「なN」の前にポーズが記載された事例を検索すると、Nに最も多く生起した名詞は「感じ」であった。

このように、「な感じ」という表現は、発話の途中に生起する際にも、名詞句や、定型的な文構造など、多様な構造に後続しうる。さらに、「な感じ」の前には構造的な切れ目が入る事例が多いことから、[X な+感じ] が言語使用の中で [X+な感じ] と再分析され、「な感じ」が独立したチャンクとして機能していることが見て取れる。発話冒頭の [Øな感じ] は、「な」の前項のスコープが「推して知るべし」のような文の単位からさらに大きな複数発話の単位へと拡張し、「な感じ」の独立性が一層高まった事例と考えれば、(4) や (5) のような事例との連続性が見えてくる。「な感じ」の先行部のスコープ拡張に連動し、「な」の性質も、語幹に接続する活用語尾から、名詞句や文構造に後続する文末モダリティ表現の一部、さらには発話頭で機能する談話標識 [Øな感じ] の一部へと発達したのではないかと考えられる。

(6) 会話における「な感じ」のチャンク化と「な」の機能変化

- a. [X な+感じ] : X が語幹 (e.g. 不思議な感じ)
- b. [X+な感じ] : X が名詞句/文 (e.g. 営業さんな感じ / 推して知るべしな感じ)
: X が名詞句/文+「な」の前に切れ目 (e.g. 1 対 1 (0.8 秒) な感じ)
- c. [X] [Øな感じ] : X が先行するインタラクション (e.g. Øな感じですね)



4. コミュニケーション環境に応じた機能分化

4.1 ソーシャル・メディアとの比較と発話冒頭要素への発達背景

前述の通り、「な」始まり発話には、「な」の後続名詞が「感じ」になる傾向が見られる。興味深いことに、この傾向はソーシャル・メディアで頻出する構文と関連している。堀内・土屋・中山 (2024) が行ったコーパス調査によると、ソーシャル・メディアでは (7) のように「な N」の前に読点が入る [X、な N] という形式がしばしば観察され、この構造の N に最も高頻度で生起する名詞は「感じ」であるという結果が出ている (「な」の前に読点が入らない [X な N] という通常の連体修飾構造では、「物」や「事」の生起頻度のほうが高い)。⁵

- (7) a. かつこいい彼氏できて、葵ちゃんよかったね、な感じ。 (堀内・土屋・中山, 2024: 162)
b. ファンとしては、何だか勿体ないなあ、な感じがする (堀内・土屋・中山, 2024: 163)

[X、な感じ] の X は、「葵ちゃんよかったね」「何だか勿体ないなあ」のような終助詞で終わる発話構造である場合が最も多く、発信者の伝えたい命題 (発話構造で表現された感情) が X 部分で表現されており、「な感じ」は文を締め括るモダリティ要素となっている。「な」は引用標識「って (いう)」とも似た機能を担っており、「な」の機能が、語幹に後続する連体活用語尾から、多様な構造に後続する文末要素「な感じ」の一部へと拡張している。このことから、ソーシャル・メディアにおいても、(6b) の段階までのチャンク化および「な」の機能変化が起きていることが窺える。

これに対し、日常会話に見られる発話冒頭の [Øな感じ] は、「な」の前項がないという点でさらに逸脱的な形式である。先行文脈を受けて文頭に [Øな感じ] が生起する (6c) の段階の事例は、規範的な書き言葉で観察されないだけでなく、逸脱的な形式が許容されやすいソーシャル・メディアでも用いられにくい。では、日常会話の中で「な感じ」が発話冒頭要素の段階にまで拡張したのはなぜだろうか。この拡張を媒介した可能性がある用法の一つが、現場にある非言語要素を「な感じ」で受ける用法である。(3) の 18 行目の「Øな感じで..」という発話を改めて見ると、「な」の前項が言語的に存在しておらず、形式上は (2) と同じ「な」始まり発話となっている。同時に、この [Øな感じ] は、先行するインタラクションでなされた説明 (言語的情報) を受けているようにも、パソコンに写っている写真の様子 (発話の場で共有されている非言語情報) を受けているようにも解釈できる。ほかにも、非言語要素を「な感じ」で受ける事例は会話で度々観察される。(8) では雪江が手を頭に置いて髪が膨らんでいる様子をジェスチャーで表したあと、文構造を立て直すように「な感じだから:」と述べる。

- (8) (R 雪) の髪って なんか こう (D ナ) なんかここが膨らんで ここが (0.2 秒)(U って) なって:(0.5 秒) な感じだから:なんか 長いと:(0.2 秒) だ (W カから) すごい なんか (0.4 秒) ぺたんこになっちゃうの。(K013_011)

発話の場で提示された非言語情報を「な感じ」で受ける用法の介在によって、日常会話のモードでは「な」の前項が

⁵ [X、な N] の構造では読点も重要な要素であるため、本稿では、関連する説明および例文ではカンマではなく読点を用いている。

言語的に存在しない違和感が許容されやすくなり、発話冒頭要素への拡張が促された可能性がある。

このように、「な感じ」の「な」は非言語要素をはじめ多様な前項と後続名詞とを緩やかにつなぐことができる汎用性の高い要素であり、その性質が、発話冒頭要素への拡張に関わっていると考えられる。「な」始まり発話と関連していると思われる、助詞始まり発話とも比較してみたい。会話では、付属要素であるはずの係助詞「は」が単独で発話冒頭に生起する、「裸のハ」と呼ばれる用法がしばしば観察される(有田, 2005, 2015; Nakayama & Horiuchi, 2021 等)。

(9) A: 論文の準備のほうはうまくいってるわけ？

B: は、比較的うまくいってるんですけど..

(Nakayama & Horiuchi, 2021: 218)

B の応答における「は」は特定の名詞というより先行発話全体を受ける発話冒頭要素となっている点で「な」始まり発話と類似している。「な」と同様に、「は」も格助詞に比べると前項の制約が緩やかで多様な要素を受けることができる汎用性を持ち、この性質が発話冒頭要素としての用法を発達させる素地としてはたらいた可能性がある。同時に、「裸のハ」と「な」始まり発話の「な」には違いも見られる。「裸のハ」は係助詞「は」より長く高いピッチで発音され(有田, 2015; Nakayama & Horiuchi, 2021), 単独で談話標識的な機能を負う一方、「な」始まり発話の「な」が長く高いピッチで発音されることはなく、「な」は[$\emptyset$ な感じ]というチャンクの一部として機能する独立性の低い要素である。係助詞「は」には多様な要素が続くため特定の後続要素とチャンク化することは考えづらい一方、「な」は後続要素が名詞句に限定されているために、後続名詞(特に、高頻度で意味的汎用性も高い「感じ」)との結びつきが強化されやすかったと考えられる。この構造的相違が、「は」と「な」の独立性の違いに寄与していることが推察される。

4.2 コミュニケーションモードの特性に依拠した構文発達

ここまで見た通り、日常会話でもソーシャル・メディアでも、本来は語幹との結びつきが強いはずの「な」の前に何らかの構造的な区切りが挿入されるという逸脱的な形式が、特に「な感じ」という表現において観察されやすい。この2つの言語使用モードは、客観的・形式的な情報伝達が重視される書き言葉のモードに比べて規範意識が働きづらく、即時性や遊戯性、創造性の重視といった、逸脱的構造が許容されやすい性質を持つ。

同時に興味深いのは、この2つのモード間でも、「な感じ」という同一の形式が異なる構文に組み込まれ、異なる機能に拡張している点である。この機能分化は、日常会話とソーシャル・メディアのコミュニケーションの性質の相違に動機づけられている面がある。日常会話は複数話者が存在する相互行為的な環境であり、会話の流れを制御する発話冒頭位置が重要な役割を担いやすい。また、発言の時間的制約が強く、即興的な発話構築が求められる。さらに、やりとりの文脈依存性が高く、単独で見ると構造的に不完全な発話も前後の発話や非言語要素の存在によって自然なものとして産出・解釈されやすい。こうしたモードだからこそ、「な感じ」が非言語要素を受ける用法でも用いられ、発話構築を立て直す要素、さらにはトピックの終結・移行を管理する発話冒頭要素に発達しやすかったと考えられる。一方、ソーシャル・メディアでは、(7)のような[<発話構造>、な感じ]という構文が多く観察される(CEJCで「な感じ」を観察しても「な」の前に終助詞が生起する事例は見られなかった)。ソーシャル・メディアは共感性やインパクトが重視される一方で、不特定多数を対象とした視覚的要素のみでのコミュニケーションになりやすく、誤解や炎上の危険性も孕む。こうした環境では、発話の形式をそのまま修飾部に置くことで発話表現が感じさせる瑞々しい感覚を伝え、共感を誘ったり目を引く表現でインパクトを残したりしながらも、文末の「な感じ」でヘッジをかけ、意見と発信者自身との間に一定の距離を置いて批判を回避するような構文が発達しやすかったと考えられる。

このように、日常会話とソーシャル・メディアにおける「な感じ」を含む逸脱的構造の比較から、言語使用の各モードで生じるコミュニケーションの特性に依拠して構文が形成されるという、構文発達の文脈依存性が見て取れる。

参考文献

- 有田節子 (2005). 対話における「文頭の『は (wa)』」の機能について 日本語用論学会第8回大会発表論文集, 1-8.
- 有田節子 (2015). 日本語疑問文の応答の冒頭に現れる「は」について—係助詞から感動詞へ— 国立国語研究所論集, 9, 1-22.
- Bybee, J. L. (2006). From usage to grammar: The mind's response to repetition. *Language*, 82(4), 711-733.
- 堀内ふみ野・土屋智行・中山俊秀 (2024). 「打ちことば」の連体修飾構造に見るモード依存の構文化 渋谷良方・吉川正人・横森大輔(編) 新しい認知言語学—言語の理想化からの脱却を目指して— ひつじ書房 157-180.
- 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2023). 『日本語日常会話コーパス』設計と特徴 国立国語研究所論集, 24, 153-168.
- Nakayama, T. & Horiuchi, F. (2021). Demystifying the development of a structurally marginal pattern: A case study of the wa-initiated responsive construction in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, 172, 215-224.
- 「中納言」国立国語研究所, <https://chunagon.ninjal.ac.jp>